

明治三十一年十二月二十六日 禮拜日 信託省認可

明治三十三年八月一日 發行

目次

社説

◎國民的訓練

◎監獄教誨

論説

◎信仰兩新舊

文學士 加藤玄智

社會

◎何をか無宗教の地と云ふ◎京都に於ける佛骨奉迎◎佛骨授受式◎書を大菩提會に送る◎南條博士の暹羅談◎佛國

大學女生徒◎軍隊の死亡數◎養育院感化部開始◎印度饑饉に付て◎四恩瓜生會

雜録

◎參會雜記

百目木劍虹

◎窮兒惡化の狀況

會報

◎北海道小樽佛教會◎近角氏の消息◎秦氏の渡米

改教時報

第三十六號

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、政教問題を研究して、政府をして公認政制度を立てしむる事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報

國民的訓練

我邦は三十年來驚くべき長足の進歩をなせしと雖も、萬事猶不揃にして訓練の足らざる憾なくんばあらずなり、忽ち見れば正々堂々たるが如くして、而も其基礎に於て鞏固不動の根底存せざるものに似たり、社會に牢強犯すべからざる制裁なく、教育に萬人仰いて遵奉すべき方針なく、商業に信用乏しく明治開明の世と誇る今日にして猶舊幕時代の商人、一時の利巧者機に投じて奇利を博する者多く、國民一般に品位を尙ぶの觀念甚だ薄く金錢を多く有する者は何時にても紳士の稱號を占有するを得べく、其上等社會と稱する者の平日を觀るに、其素行は誇るに足るべき者は至て少く有様なるは歎はしき次第なり、其何れの社會も基礎の堅固ならざる一二例を擧ぐれば、彼實業社會を見よ、世界の一方面に一事變の起る毎に、不景氣の叫び、恐慌の聲を聞かざるはなし、其度毎に事業家資本家の間に破綻を來す者は指を屈するに暇あらざるなり、改めて言ふも野暮ながら世界は活物にして經濟上の變動の如きは日々夜々に來るを常とすれば、一事の起る毎に周章狼狽して政府に向て救済を仰ぎ助勢を請ふ如きは、歐米先進國には先以て少く事例なりとす、是豈經濟界の基礎の堅牢ならざるを證するものにあらずや、更に之を政治界に見よ、

政教時報第三十五號目次

- 社説 世の仁人に訴ふ◎外一件
 論說 所感(鈴木秀太郎)
 社説 清澤氏の大谷派教育意見等
 雜錄 北遊雜記(本多文學士)
 信家 おもひやり(本多文學士)
 會報 故稅所教子刀自(下田歌子)
 近角氏の消息等

本誌廣告

- 一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一個増の事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全 國
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無 遞 送 料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十三年七月三十一日印刷 發行所編輯人 上村幸三郎
 明治三十三年八月一日發行 印刷 清水朝太郎

予輩徐に彼政黨なるものゝ行動を觀るに、最近數年間のみにて其變動の劇甚なる實に驚くべきものあるにあらずや、變更に變更に經て、遂に自進兩大黨の對立となり、其間に國民協會の如き小黨の介立するありて、是より少しく面白き政黨的立憲的行動を見るべからんと豫期せるに、爾來の行動甚だ吾人に満足を與ふる者少くして、其離合集散といひ、其向背云爲といひ、眞個に狙公の朝三暮四も管ならずして、吾人は其變更の送迎に忙はしきに堪へざるものあるに、近來又一大黨は解黨せられて將に新政黨は組織せらるべしと噂す、予輩の寡聞なる歐米諸國に於ては未だ斯る一政治家の一言の許に忽ち既成の大政黨を解散して其主義を變じ其組織を新にせる歴史を多く知らざるのみならず、近き將來に於ては先以て斯る事變は來るべしとも思はざるなり、是に於てか予輩は斯る歐米には得て望むべからざる大勢力ある政治家を我國に得たるを喜ぶと同時に我國の政黨なるものが未だ訓練を欠き基礎の動搖し易きを歎せずんばあらずなり、然れども是等數者は予輩が直接に關せざる所なりと雖も、惟我國民は猶國民的訓練の不足なるに至ては予輩深く大に歎惜せずんばあらずなり、見よ我國未だ眞正の輿論換言すれば國民の叫びなる者の杳として聞くべからざるにあらずや、其聲や内閣も傾聴せざるべからず、議院も服従せざるべからざる底の、強き深き廣き且大なる叫びは未だ聞き得べからざるにあらざるか、若し聞くべしと言は、内閣の命なり議院の議なり、之に國民の應和するの聲なり、二十七八年の日清戰

役に於けるが如き是のみ、而も是稀有の事例なり、國民の間より起れる高き長大なる響をば予輩の聞き得ざるを悲む、如何なる大事にも自己頭上に利害直接ならざる事物には聲の小なるは余輩の大に遺憾とする所なり、今回の北清事件の如きは我帝國に取りては、其成行如何によりて將來利害得喪の關係する所實に尠少にあらざるべきは、常識ある者の普く知る所なり、而して之れに對する國民の叫聲は如何にあるか、操觚者一流の縦論横議は之れありと雖も、未だ國民の深き腦底より發したる沈痛なる叫を聞く能はざるなり、經濟界救済の叫びに於て、紡績業者等の切實なる聲なきにあらざる、局面展開策に於て政黨員等の慘憺たる苦心經營は見ざるにあらざる、而も現下日本なる大船を如何なる方向に進ましむべきかといふ(北清事件に對して)羅針盤を爲し得べき輿論に至りては、予輩が數千里外の倫敦、聖比得斯堡の夫を見聞するよりも猶杳たり渺たるを覺ゆ、而して動もすれば外交の不振を責め當局者の無能を難す、抑之れを有理と許すべきか、當局者も亦初に於て力めて民意に重きを置き、輿論を傾聴するを爲さず曰く外交の事は秘密を要すとて、公にするも些害なき事をも秘し隠しにして、其獨己の意見に任せて事を處し、若し失策あらば則曰く、國力足らざるが故なり、輿論の後援なきが故なりと、何ぞ夫れ狡猾利口なるの甚しき、畢竟するに此二者孰れも罪なしといふべからざるなり、古の君子は廟堂の高きにあるも、巖穴の深きに在るも君と民とを忘れざりしなり、立憲治下の民人は、人々各此心を以て心とすべきあり、朝に

在ると野に在るとに別なく國家に對するは一なり、然れば則ち當局者は常に能く輿論を啓誘し、之を尊重し之を聽用すべく、國民は常に國事に留意し、輿論を以て當局者を促し、彼等をして進退據る所を得せしむべし、國民的訓練の行届ける英國の如きは、平日政黨の争權甚しきにも關らず、事あるに臨みては、朝野官民の間の圓滑なる和協の間に、沈痛實なる長く大なる叫を聞き得るは眞個に欣羨すべきものあるを見て、吾人聊か我敬愛する所の同胞諸君に向て、其聰明に訴ふる所なり、

監獄教誨

教誨事業の効果薄き事に向て云々し、攻撃の筆法を弄し、遂には寧ろ廢すべしとさへ論ずる者近來出で來れりと聞く、吾人は早晩此聲を聞くべしと豫期したりき、未だ其聲甚だ小弱なれども猶一層其聲の高まるべき災厄の來らんことを寧ろ信せんと欲するなり、然れども是素と根本的の謬見より來る所の議論に過ぎざれば予輩は豫め一言啓蒙の言を費し置かんと欲するなり、元來何事に因らず物には過大に見る弊あるものなり、一二の著しき例を取りて言はば、明治二十年前後の頃憲法未だ發布せられず、議會未だ開かれざるに當りてや、卓見達識の士は暫らく措いて論せず、中流以下の無教育若くは時事に味き輩は議會を以て萬能と過信し、若し一度國會の開設せらるゝに至らば租税は著しく輕減せらるべく、貧弱者は救護せられて生計に安するに至るべく、其他何といひ賦

といひ、諸人皆勝手に自己の好都合に至るべきことを豫想しつゝ、ありし狀は識者の一笑に値するものなくんばあらざるなり、又かの改正條約實施期日前數月の狀を見來れ、イザ改正條約も實施せられ、外人に向て内地雜居自由の權の與へらるゝ、其日より直に締盟各國人はゾロゾロ群を爲し隊を作て、日本國中津々浦々までも入り込み來るかの如くいひて、騒ぎ立たるにあらざるや、然るに實際となりて見れば、舊條約時代と今日とさしたる相違もなきにあらざるや、議會の效果の如きも彼等一輩の豫期に反せるは言を俟たず、知るや知らずや、昨三十二年一月頃文部省に於て尋常中學長會議々場に於て中學生徒喫煙禁止を實行せんとの議出で、一部の論者は校外の取締は警察權を借りてすべしといへるに、又一部教育萬能を信せる(?)論者は教育者が感化によらずして警察權に依頼するなどは不面目なり、而も警察權を借りずば學校外に於ての取締なり難しとの説多數を制して遂に禁煙案は脆くも消滅し歸せし事を、其後間もなく、未だ丁年者禁煙案は議會を通過して法律となりたり、曩の不面目論者如何の感かある、元來教育なり法律なり其萬能を信するは固より言ふに及ばず、少くとも効能を過大に信するは吾人々類の陥り易き誤謬なり、宗教の事豈惟り然らざらんや、况んや監獄教誨の如きは、囚徒の過年は假令天性ならずとすも、習慣痼疾となれる惡漢毒婦にして、罪を犯す事を茶漬を食する如く思へる徒輩に向て仁道を談じ、佛陀の德音を傳へんとするものなり、夫等の徒に向て、教誨の效果の著しく擧らざる素と其分なり、然るに

世人動もすれば過大の希望を監獄教誨に向て置き、醜類皆化して仁人君子とならんことを俟ち置くもの、如し、何ぞ思はざるの甚しきや、又縱令獄中に於て改過遷善の念を生ずと雖も、出獄後は我社會は殆ど彼等をして善を爲さしむるを許さずして、時々刻々惡を爲さしめんと誘引しつゝあるなり若し強て惡を止め善を爲さんと欲せば、彼は非常に強固なる意志を以て困難を冒して社會と戦はざるべからず、然るに多く皆此困難に打克つことを得ずして復惡道に陥るなり、思へば憐むべきの至なり、是に於てか、予輩は出獄人保護の必要、感化院設立の至要なる事を唱道するなり、他事は措く、監獄教誨は著しき効果なしといふ、世間監獄改良を叫ぶ者多くして、着々改良せらるゝにも拘らず、何れの部分か著しく進歩し著大の効果を奏したるや、仔細に調査せば果然たらざる人は稀なるべきを斷言するに憚らざるなり、然れども多數の囚人中一人たりとも教誨を縁として悔過遷善する者あらしめば、憐なる徒輩をして其本心の閃光を幾微だも認むるを得せしめば、吾人が社會に對して神聖なる義務を盡す者にあらずや、決して佛教家より評する時は是佛縁を結ばしむる菩薩行なり、監獄教誨や固より多大なる顯著なる効果なきは其處なれども、余輩は聊か社會が此神聖なる義務を果し、此廣大なる菩薩を行せん事を希ふものなり、

新舊兩信仰

加藤 玄智

回顧すれば、我邦は勿論歐米諸國に於ても、今半世紀間に於ける科學哲學は偉大なる長足の進歩を爲せりと、軌近東西の交通益々頻繁密接を致し來たりたるもの原因は、十九世紀末の吾人をして其智識經驗の範圍を擴張増大せしめたる、之れを前世紀に比するに實に天淵霄壤の差も嘗ならざるは夙に公平なる識者の等しく是認しをる所なり、從て吾人の信界亦昔時の舊套を以て甘んずる能はざるや蓋自然の結果なりとす、此に於てか彼れと云はず我れと云はず海の内外に論なく人種の黃白を問はず、何等か斯くの如く増大擴張したる吾人の思想を満足し、智情意を有する吾人の全精神を通じて、之れを智性に訴ふるも感情より考ふるも亦意志の方面より見るも、毫も過不及なき精神上に調和的平衡の状態を得んことを渴望しつゝありて而かも未だ斯かる心狀に到達し得られざるものあり、人心恟々として其堵に安んずる能はず、此に於てか懷疑の妖雲は暗愴として漸く思想界の一方に顯はれ來り、人民の道義地を掃ひて去り廢倫俗を成し感覺的快樂主義漸く上下を風靡せんとす、恰も是れ源巽悒鬱陰雲漠々悒悒人心を倦ましむるもの、彼の驟雨一霎滿天の霹靂清館の涼風を送りて至り、人心の爽快を致すの時果して如何ん、然れども斯

かる快心の成果は到底新舊兩信仰を姑息的に纏繞し安を一時に偷むが如きの因循手段を以てしては到底成し得可きものに非ず、必ずや根本的の一大刷新の大治術を要するものなり、換言すれば舊信仰の今日既に非眞理となりし所のものは遠慮會釋無く破壊し去りて新信仰の基礎を樹立せんと企圖せざる可らず、故に基督曰く新衣を裁り取りて舊衣を補ふ者あらじ若し然かせば新衣を壞ひ且つ新より取りたる布は舊きものと合はず、また新酒を舊革囊に盛るものは非らじ若し之をせば新酒は其袋をはりさき漏れ出づ、かつ革袋も壞るべし、新酒は新革囊に盛るべき者ぞ、斯くてこそ兩ながら存もつなれど、宗教は舊きが故に神聖なるに非らず信仰は必ずしも次第相承なるが故に尊きに非ず、陳謝し新代はるは天下の通理なり、進化は萬物の天則なり、宗教豈に獨り此理を免るゝを得んや、試に思へ吾人の智識經驗は益々増大し宇宙萬物は時々刻々に進化發達しつゝゆくの時當りて、宗教獨り其舊時の古態を株守せんか、斯くの如きの宗教は以て之れを亞非利加内地の蠻族間に布くを得可く、未だ以て文明諸國の宗教と爲す可からざるなり、否な文化の發展今日の程度に迄達しをれる文明國に在りては斯かる舊宗教は眞に何等要なきものとす、故に彼の所謂宗教家なるものも頑迷不靈なる、宇宙間に於ける萬事萬物一として進化の理法に支配せられ、日々夜々に進化發達せざるもの無きに關はらず、宗教のみ獨り之れを依然として舊時の古套に安んせしめんと欲す、斯くの如きは眞個に愚に非ずんば則ち狂なり、吾人實に彼等の眞意果して那邊に

あるかを解するに苦しまずんばならず、又宗教家中少しく進歩したる思想を有せる輩に在りては、彼の所謂媒介神學者流の姑息主義を稱道し以て新舊兩信仰の調停を試みんと欲すと雖も、是れ畢竟姑息の一時の彌縫策たるに過ぎざる也既に活眼なる識者の蚤に觀破せる所、斯くの如きは到底二十世紀人文の新舞臺に立ちて座作進退す可きの器に非らず、來らん二十世紀は斯かる規定的信條に拘束せらるゝこと無く、唯眞理の爲に眞理を説くの根本的眞誠至誠なる信仰を渴望して止まざるものなり、果して然らば斯かる信仰とは抑々是れ如何なるものなる乎、斯かる信仰は今日所謂科學哲學の諸智識とは如何なる關係を有せるものなるか、畢竟現今の精神界に於ける一方の翹將たる科學哲學と宗教との兩者の關係果して如何ん、抑々此兩者は全然矛盾せるものなるか將た又此兩者は互に相容れ得るものなるか、是等の諸問題にして一たび明晰なる解答を與へらるゝを得ば、今日洋の東西を問はず、邦の内外を論せず人類の大部を擧げて此問題の解釋に懊惱しつゝある幾萬の頭顱は一大安慰を得るに至るものなり、斯かる問題の解答上に建設せられたる宗教は則ち是れ眞に吾人の精神の急需を救ふの蘇生劑たるものなり、不知斯かる宗教なるもの果して那邊に在りて存するか、然れども是れ實に當今に於て、その理論的精神界たる實際的思想界たるに論なく、これは最も根本的にして又最も切實なる至要問題なりとす、然れば斯かる問題の解釋は到底一小雜誌上に於て能く論明し盡くすを得可きものに非ず、又余が淺學菲才、敢て斯かる大問題を捉

へ來りて自ら之れが解釋を成果し得て、以て大方に示めさんと擬するものに非ず、然れども斯問題たるや眞個に時代精神の且暮りの解答釋義に熱望しつゝある所のものにして、宗教界と道徳界の諸問題は一に、斯問題の解釋如何に由りての大半は先決せらるゝを得るものなるが故に苟も志を教界の今日に注ぎ人心の道徳社會の風尚をその根底より策勵せんと擬する所の者は、實に寸時も嘿々に附し去る能はざる所の問題たるは何人も等しく是認する所のものなる可きが故に、余は不肖自ら揣らす先づ槐より初めよの古諺に習ひ、余の心竊かに信する所のものを筆して新信仰の特性を開説し不日之れを世に公にして以て大方の教を請はんと欲す、然れども世人或は謂はん汝は又辯を好む者なりと、然れども余はシュトラウスと共に謂はんんとす、曰く余は敢て他人精神の平和を破るを以て自ら期するものに非ず、余は唯既に各自その舊信仰の破壊せられ而かも新信仰の之れに代はる可きもの無く、懊惱措く能はざるの輩に向ひて聊かその新信仰に對する鞏固なる礎柱を與へんと擬する所のもの余豈に辯を好まんや又止むを得ざればなり、余豈に辯を好まんや又止むを得ざればなり。

社會

◎何をか無宗教の地といふ 日本全國比較的宗教に冷淡にして無頓着の風あるは、東北地方を以て最となすべきか、其次に來るべきは遠州より函嶺を越へて關八州に互り曠

漢たる山河は殆ど無人の地を行くが如く、無宗教の風は到處に吹き荒み、全く回復の望なしと謂ふべきか、想ふに東北、關八州の地一たび日蓮起り、親鸞出で盛に布教の地を拓き、人心に偉大なる感化を與へ、法燈赫々として長へに千歳を照せしとは史上に徴して炳焉たり、今や祖師の遺徳に由て僅に法燈一縷の命脈を維ぐに過ぎず、豈悲むべきの現象に非ざるなきか、人生素より宗教と相俟つ者、何物か胸中秘奥の琴線に觸れんことを希はざるはなし、鏘然として響を發せざるものは其罪實に布教者の任にあり、今時猥りに教界偉人の出現を望むと雖も、單に希望に過ぎざるなり、一個の偉人の現れんよりは吾人は實に熱心に眞面目なる布教者の多く出てんことを望むものなり、無宗教の地といひ宗教に冷淡なりといふも、其實之を開拓せざる牧師なきのみ、布教師なきのみ、吾人は今回佛教青年會の夏期講習會に臨み竊に地方宗教の狀態を察するに羨靡として振はざるに至ては吾人をして眞に一驚を喫せしめたり、駿州の地素より宗教に熱心ならずと聞く、蓋し寺院多からず僧侶少なき故ならんと思ひしに決して然らざるなり、寺院少きにあらざる僧侶も亦多し、而して宗教の振はざることを如斯しとせば、其責果して何人に歸すべきかは問はずして知るべきなり、吾人は現今の趨勢に鑑み轉た嘆息の情に堪へず敢て地方僧侶の一大奮勵を望むで止まざるなり、

◎京都に於ける佛骨奉迎 前號に報道したるが如く去月十九日愈々京都に若せられたり、今當日の模様を少しく記さんに、東本願寺前より七條停車場附近は參觀人實に堵の

如く人を以て埋まられたり、佛骨奉迎事務總理村田寂順師を始め各宗管長其他奉迎委員等先着し停車場樓上に休憩して列車の着するを待てり、午前八時三十分煙火の打上ると共に佛骨及奉迎正使一行を乗せたる列車は午前八時五十分七條驛に着せり、正使大谷光演、副使前田誠節、同日置默仙の三師以下隨行員一同下車し佛骨の赤地金欄の蓋をなせる唐櫃に納めたるを車中より卸し眞先に奉迎と記せる紫の旗二旗を押立て常任委員名和淵海師先導して村田總理先列し次に佛骨を納めたる唐櫃を常任委員土屋觀山、後藤禪提の二師にて昇り大谷正使、前田、日置兩副使及び暹羅公使各宗管長僧侶信徒等にて順次に隨行し信徒諸講中は紫、赤、白等の各旗數十旗を列の前後に押立ていづれも徒歩にて停車場を出づ烏丸通を北へ進行せり、九時三十分大谷派本願寺本堂門より入る本堂階下には樂僧整列し迎儀樂を奏し法主大谷光瑩氏及び連枝は同處に奉迎し唐櫃は本堂階段を昇り昇り内陣に入堂しそれより高廻廊を経て太師堂に入り大谷正使唐櫃より赤地金欄にて作れる高さ一尺幅八寸許の袋に入れある佛骨を出し内陣本尊前に設けたる八脚臺に打敷を掛け其上に置きある總金塗經机の上に安置せしが間もなく暹羅公使各宗派門跡管長奉迎總理高等官以下各宗派奉迎者一宗派づゝ順次拜禮焼香同寺内の休憩所に入り當時韓國前軍部大臣趙義淵氏も大坂源正寺住職祖父江聖善師の案内にて來式參拜ありき

遺骨を安置せる寶輿は白丁のもの十二人にて擔ぎ次に正使大谷光演師及び副使前田日置の兩師暹羅國公使其他各宗の奉迎委員數千名次に各宗の信者三千餘名にて其行列の全く東本願寺の大門を出でたるは午後三時過なりしが前列は同二時二十分頃既に妙法院に入りたり斯て佛骨は豫定の妙法院寢殿に安置し當日は村田總理以下參拜し翌二十日より各宗各派の僧侶交るゝ焼香せられたる由此行列を見んとて十九日の京都は午後に至りて人出一層甚しく七條二條の兩停車場は瀛車着する毎に降客殆ど五千餘人近頃稀有のことにて畿内近傍の諸國は勿論西は九州、山陰、山陽、四國及び佛教流行の北陸地方その他東海の諸國を始とし遠く北海道より後馳せに來るも多く京都にありし僧侶の數は總じて一萬二千以上なりしなるべく參列のため來りし諸國の講中は三萬餘人、行列拜觀のため路傍にありしものは廿三萬五千と註せられたり、蓋し近來の盛事といふべし

◎佛骨授受式

去月二十三日午前十一時より暹羅公使立

會奉迎使より佛骨を各宗派管長奉迎事務總理各宗派奉迎委員に授受したり佛骨は猶ほ妙法院寢殿に假安置しあり不日各宗管長相談の上覺王殿建築の位地をも定むる由右に付き暹羅公使は去月十七日東京より來りて佛骨を大阪に迎へ其れより引續き京都の法會に參詣し同じ廿四日朝七條發にて歸東したりと授式の日村田奉迎總理の祝詞及び公使に對する謝辭ありしに公使は左の答辭を述べたりと

各宗長現下總理現下及各高僧揚下

余は今懇到なる村田總理現下の謝辭に接し汗顔に堪へざるなり余が勞は之を各日夜の盡瘁に比すれば眞に萬か一にも當らず余は却て各位が誠を受するの深き即ち法に盡すの大なる此の如きを致すに感激するものなり抑貴國佛教の益々隆盛ならんとは我國土階下の深く希望せらるる所に於て奉迎現下の如く親しく禮節を拜して承はられたる處なり而して勅令を蒙りて特に東京より來り會したる余が盛大壯嚴なる古今未曾有の式に列し無數の人民の熱心なる歡迎禮拜を蒙り且且數日の間此山美に水清き都に滞在して諸本山及靈場を拜し到る處禮待を蒙り今又茲に佛骨授受の式滞りなく了せられたるを觀て具さに之を陛下に奏報するの時如何に御慶應はしあらせらるべきかを想像し奉るに餘りあり今や余の任務を終へ袖を各位と別たさるべきに臨み特に一言を呈し置き度あり今回の奉迎に於て禮拜人民の夥しき參列僧侶の多き佛式の盛んなる禮節の美なる眞に前代未聞なりと稱せらるる之れ誠に然らん然れども余の特に喜ぶ且感したるものは佛教各派が洩れなく賛同結合したるにあり法の爲に一切の情實を忘るゝにあり親睦團結の固くして外敵を以て驚嘆せしめたるにあり此美德にして存する限り佛敎盛んならざるを得ず故に望むらくは佛敎各派を代表する各位が永く此心を以て心とせられ何等の場合に於ても常に佛敎全体の爲にするを忘れず相助け相助け相勵み世界上早絶せる此敎をして愈々盛大ならしめられんことを

明治三十三年七月廿三日

暹羅國遺影授受式場に於て

◎書を大菩提會に送る

印度飢饉に關し佛教主義雜誌社聯合して左の如き書を送りぬ、吾人は必ず吉報の到らむことを待つ

肅啓、佛骨奉迎に關し種々御盡力の段奉萬謝候扱て御承知の如く今回の印度飢饉は古今未曾有の大慘事にて日々數十萬の餓死者を生じ六千萬の生靈は今や生死の境に呻吟仕居候悲惨の狀態若し大聖世尊此世に在し候はば骨を挫き肉を割きたまひても御救恤あらばされ候事と恐察仕候我等佛陀慈仁の教旨を奉ずるもの、默視すべからざる義と存じ今回佛教主義雜誌社聯合仕り聊か之が救恤に従事仕居候得共微力の我等到底充分の功をも奏し兼ね痛心痛心能仕候處、幸に貴會に於ては既に佛骨奉迎に關し巨額の金員御募集相成候由承り誠に申上兼ねたる義に候へ共其御費用若くは覺王殿建

全權公使侯爵 リチロンツ、ロナチエト

築の費用の半を割きて印度窮民目下の急を御救ひ被下候へは獨り我等の幸福のみにてはこれなくこれ實に佛陀の御本懐と奉存候右愚衷御洞察の上御採用被下度謹んで懇願仕候謹言

明治三十三年七月

佛教主義雜誌社聯合會

日本大菩提會委員御中

◎南條博士の暹羅談 佛骨奉迎正使大谷光演師に隨ひ暹羅へ渡航せる文學博士南條文雄氏去月二十四日沼津佛敎夏期講習會に於て一場の暹羅談を試みられたり其大略は既に新聞紙上に報道せられたり曰く佛敎の暹羅に入りしとつていは盤谷に滞在中種々取調べし何分正確なる歴史なきとゆゑるの年代は詳かならぬも釋迦如來後弟子の一人同國に來りて布教したりとのとなるべし其勢力は偉大にして歴代の國王は何れも佛敎に歸依し佛門に入らざるもの少し特に現國王より三代前の國王は二十歳にして出家し廿七年間緇衣を纏ひ其後王位に即き佛敎のため大に力を盡しければ佛敎ますます興隆し中流以上の貴族は必ず一度佛門に入るの例となり而して實際佛門に入らねば政治その他の社會に對するも勢力なきものとなりされば盤谷市中の寺院は頗る壯嚴にして特に宮裡にある寺院の如きは頗る華美を極め安置せる佛像は寶石を以て作り設置せる作花は同國北部の殖民地より毎年献納するものにして金銀を以て作られたるものなり其他諸種の裝飾品もまた皆珍奇ならざるはなくかくて同國の珍寶美術品は悉く王室及び同寺院に吸集せらるるといふも敢て過言にあらざるべし又同國の佛書は皆印度のバアリ語を以て記され僧侶の一般布

教に従事する場合は之を暹羅語に譯して説く者の如し扱佛骨の暹羅に傳はりし次第は印度のバステイ州に於て去明治卅年英人ウイリアム、ベツペ、ジョーチ、ベツペといへる兄弟が發見し發掘に着手し一時中止せしを英人スミスの奨勵により再び着手し遂に一の瓶を發掘し其蓋に記せる文字に就て釋迦如來の遺骨なることを知り英國政府へ届出しかば同政府は之を暹羅國王に送りて其内上ビルマ下ビルマに各一片及び印度セイロン島に三片を配たんとことを依頼したるより同國王は本年一月盛式を以て之を各國の奉迎使に渡し稻垣公使等の盡力により好意上その一片をまた我國に配たるに至りたるものなり從來同國に行はるる佛敎は所謂小乗敎なるが僧侶の生活は善く釋尊の敎を守りて規律嚴肅なり王族といへども毎朝必ず跣足にて市中を托鉢し信徒は道路に跪坐して之に米或は錢を喜捨すれば僧侶は恰も佛の身代といふ姿にて之を受け會釋もなせず無言にて行過ぎ其見識こそ却て日本僧侶等の想像し及ぶるところなり又食事は二食にして不可晝食と唱へ正午迄に二回の食事をなし午後より翌朝迄は一切食事をなさざるなり又同國には耶蘇敎バラモン敎マホメット敎なども侵入しをるもその勢力微弱にして下等社會及び移民の間に行はるるのみマホメット敎は主としてマレー人の間に行はるるもの、如く詮するに同國敎育の權は今尙佛敎徒の手にありて中流以上のものにて外教に歸依するもの少きが如し云々

◎佛國大學女生徒

佛國大學評議會の最近會議に於て朗讀せられたる、過る學年に關する文部大臣への報告書中に、

大學女生徒の各大學部に於ける成績益々良好なる旨を報じ、而して其の學科別及び内外の員數を示したるを見るに、大略下の如し、醫科大學の女生徒は百二十人に下らず、此の内佛國人二十九及び外國人百にして、更に之を國別すれば、露西亞人九十一、羅馬尼亞人五、獨逸人二、瑞西人一、英吉利人一なり、されば此の部に於ては外國人の方佛國人よりも遙かに多し然れども文學科の全體(即ち純文學、歴史、哲學、今語)に在りては、佛國女學生二百六人にして、外國女學生は獨、露、米等合せて五十七人なり、法學科を修むる女子の數は至りて尠なく、即ち佛蘭西全國に七人及び巴里に四人(内佛國人二、露國人二)を算するのみ理科大學部は稍々多くして、三十五人を算し、此の内佛國人二十一、外國人十四なり、最終に藥劑學を修むる女子二十人あり、内十九は佛國人にして外國人は僅かに一人なり

◎軍隊の死亡數

是れ統計上忘る可らざる一題目なり、佛國の某統計家は此の點に付有益なる報告を興へたり、第一に千七百八十九年より千七百九十九年まで十箇年の間、佛國に於て徵募せし兵員は二百十萬人にして、此の内死亡數七十七萬人なり、次に那破烈翁が徵募せし兵員三百萬人中死亡せし者百萬人なり(千七百九十九年乃至千八百十五年)、次はクリミヤの戰役にして、此の役は左まで長からざりしが、遠征軍の數は三十一萬人にして其の内九萬五千を失へり

前記の死亡數を一見すれば、何人も其の割合の非常に大なるに驚くべし、然れども若し兵器の爲めに死すべき割合を此の

數に據りて推度し得べしと思はれ是れ謬れり、蓋し右死亡の大半は疲勞、疾病及び壽命に因れり、故に千七百八十八年より千八百八十九年に至るの間、即ち最も戰爭を以て充たされたる此の一百年間兵器の爲めに殺されたる士卒の數は百萬人に過ぎざりき、英國の統計家は此の數を諸工場の死亡數に比較し軍營に於ける兵士は工場に於ける職工よりも危險に遭ふの機會尠なきことを證明したり、然れども是れ幾分か輪を掛けたる説なり、想ふに今回トランスヴァールの征役は既に將校に於て失ふ所甚だ多く、爲めに該統計家をして頗る意外に感せしむるならん

◎東京養育院感化部開始

同院にては去月廿二日其開始式を行はれたり、其の概況を記さんに、當日午後八時足立養育院幹事開會を述べ松田市長、千家知事の祝辭あり、澁澤委員長は答辭に加へて養育院及び感化部の沿革の成立を述べ併せて慈善事業の發達を奨勵せられたり、それより三好退藏氏は感化部顧問として演説し、清浦司法大臣、土方伯の奨勵演説ありたり。同部には養育院收容の幼年貧兒より轉入せしもの十名にて、當部の設計は先づ五十人を期したる雜居制のものにて則ち家族制の正反對のものたり、そのいづれか成功すべきかは猶三五五年の後たるべし。當日の來賓は千家知事、松田市長、土方伯、清浦司法大臣、渡邊洪基氏、市參事會員等にして中々の盛會なりしと云ふ

◎印度饑饉に付て

は本誌屢報道せしが今や志士仁人は大に同情を寄せられ、義金を投せらるる者少なからず、東京

に於ける佛教主義の雑誌社又去月十一日上野三宜亭に相會し之が救済に關する協議を開き其結果として十五十六十七の三日間大演說會を開くことに決し暑中の折柄とて聴者も多からざりしに拘はらず三日間演說會に於て募集せられたるは實に二百圓近くに上りしと云ふ、而して佛教主義の各雑誌社は率先して義捐金を募ることにせられたり依て本會も世の仁人に訴へ多少に拘はらず喜捨せられんことを望む、本會は喜んで取次の勞を取るべし、委細は本號廣告欄内を見るべし

◎四恩瓜生會 去る二十日正午より東京市養育院會堂に例會を開き天氣感しかりし爲め來會者四十餘名のみなりし先づ出征軍人戰没者法會及養育院死亡者法會(導師功方日慈僧正)を營み後ち神谷僧正の講話及び印度學生プランシング氏は鳥地雷夢氏の通辨にて印度飢饉の慘狀一日は一日より迫れば義侠心に富める日本人に救助を訴ふ旨を述べられたり夫より在院者一同へ白飯及煮素麵を施與して散會せり當日席上に得たる義金は參拾圓にして猶ほ進んで義金の勸誘を爲す筈なり

雜 録

參會雜記

百目木劍虹

余は今回久々にて佛教青年會の夏期講習會に列することを得たり、余の參會せし頃は既に會期の半を過ぎしと共に、連日

の雨天に加ふるに微恙にかゝり何等の得る所なく忽々として歸京の途に就き再び黃塵萬丈の俗客となりぬ、記する所興味索然として讀者は蟻を囓むの思ひあらむ、たゞ余は後日の思ひくさにも思ひかくは記しぬ

◎一日余は島地雷雷上人に從ひ郡長の紹介を得て三島の小松宮別莊を拜觀するの榮を得たり、邸の廣さ殆ど四萬坪、奇巖怪石悉く天然の趣ならざるはなし、水あり湧々として其間より湧出す蓋し一大池水をなすものは、水や清くして掬すべく魚の潑刺として躍るの狀歷々目睹すべし、鯉魚の數二萬餘に上り小なるものと雖も尺餘を下らずと云ふ、孟軻の所謂於菟ちて魚躍るとは是れこの謂ひか、眞に壯觀たり、白雁の泛々として水に遊ぶをみて誰か浮世の夢を悟らざるものやある、小橋又小橋を渡りて遙に十數羽の仙鶴の渚に群れるをみる、案内者に向て之か飼養料を問へば五百金を要すと答ふ、上人傍にあり突如口を開いて曰く余鶴たらんことを欲すと、一行爲めに手を拍て洪笑

三島は沼津を東に距ること里許有名なる三島神社のある所なり、水の清きを以て世に知らるゝことは彼「富士の白雪朝日にどけて、流れて、三島に落ちて」云々の俗謠に徴しても明なり

◎嘿雷上人老いて益々鏗鏘、日々沼津郡會堂に於て、大小二乗の三法印に就て雄辨を振はる、平生の難澁窮幽に似ず聽者をして頗る快味を感せしめぬ、「以呂波」歌の解釋を以て諸行無常等を説明すると頗る詳、今左に歌に關する分を記せむか

元來以呂波歌は世の無常を示し轉迷開悟を教へたるものにして、弘法大師が涅槃經の諸行無常、是生滅法、生滅々已寂滅爲樂の四句の偈によりて作られたるものなり、大師は大乗至極の妙法を説いたる人なるが故に單に厭世觀と思ふは大なる誤なり、以呂波と題したるは論語にもある通り「學而時習之」とある故、學而第一と云ふ如く其頭字を取りて初めに以呂波と題したる者と解釋するも誤りなからんも、たゞそれ丈にては遺憾なりと思ふ、此以呂波の三字は即ち字母と云ふ意味にして總して此四十七字を指したる詞なり、何となればカゾイロハと云ふ言葉は最も古い言葉にしてこれ即ち父母の事を云ふなり父をカゾと云ひ母をイロハと云ふとは日本紀にも見たり、以呂波が即ち文字の母なる故之を知り居れば凡ての言語を寫すに差支なきを以て、如斯の意味合よりして其字母を取て以呂波と命名したる者なり、國學者が之を見て佛教の意味にて作られたるもの故忌ましく思ひて之を作り換へたるものあり、何れも拙劣にして見るに足らざれども流石一世の國學者丈ありて本居宣長の分が最も宜しく思はるゝ乃ち

あめふれば、おせきをこゆる、みつわけて、やすくもろひど、おりたちうゑし、むらなく、そのいねよ、まほにさかぬ。

これなり、この歌の意は雨が降て田に苗を植へ段々成長して澤山米が出来たと云ふ意を歌ひしものなり、云々

此外數人の作者を擧げて説明を加へられたり今は一々記憶せず、以呂波四十七字なるに因み赤穂の義士が四十七人なるを

以て何人の作なるかは知らぬとも左の歌ありとて示されたり

「極樂の道もまづかに通るべし、阿彌陀を添へて四十八人」尙種々の面白き例を引き來り聽講者をして倦怠の色を生せしめざりしは、上人の大出來なりと云ふべし、以呂波文字上に付て委く説話せられたれども、講話集の領分を侵すを恐れ以上の大略に止めおかん、専門以外この濫著の深さを見る後進の余輩惶惶として豈耻ざるを得んや

◎一夜風雨を冒して山川兄と共に清見寺の老僧坂上宗詮師の寓を訪ふ、其語る所俗臭を離れ而も一々時弊に肯綮するものあり、暫く其一二を紹介せむ

先づ突として口を開いて曰く、清見寺を訪ふて來る人も近來中々多くありますが、實は此老僧の居る爲にあらすして三保の松原と云ふ風光の地あるが故、其御蔭にて清見寺が賑ひます

とて洪笑一番、僧侶の腐敗を罵りては

あまり坊主共は多うすぎますから、ドーモ仕末に困ります、吾々其の宗旨から申さうならば、一個の私見なれども公然肉食妻帯する方が現今の有様では宜しう御座います、若し女子でも生れましたら看護婦にして貧乏人を救ひ、熱き同情の涙を灑ましたならば、腐敗坊主の説教より幾倍の効を奏するかも知れません、今後の宗教界に於きまして牛耳を採り覇權を握ります宗教は社會問題に手を出し實地其衝に當る宗教は例へ教理は卑近でも最後に勝利を占む様と思ひます全體今の本山杯と申すは何事をなしつゝありますが、

弊實の伏する所は常に此本山でありまして吾々は左程本山の存立を認めません、ハア……統一ですか………今
の末寺共が皆獨立獨歩布教をやつたならば統一なくとも非常に好結果を得ることと思ひます、何事も自然淘汰に任した方が宜しう御座いませう、自然淘汰の風は早晚否現に宗教界にも吹きつゝあると思ひます、
論談尙盡きずして戸外の風雨益々烈しく屢々話頭を遮りて耳に入らざることあり、乃ち辭し歸る、
(宗詮師の事は次號に於て尙記する所あらむ)

窮兒悪化の状況

(左の問答は他の記事より後のものなれども記事の順序に依り爰に記載す)

窮兒との問答

爰に窮兒に對する問答二三を掲げて參考とすべし之を一讀せば其悪化の事情に於て思ひ半に過ぐるものあらん但其姓名は彼等が生長の後名譽に關するものなれば態と變名を掲げぬ

窮兒 成瀬龜太郎 十一歳

性最、伶俐、答明確、眼光炯々、人品卑からず

右は明治二十九年七月十四日迷兒として京橋警察署より送付せし者あり

○お前の國はどこ

△參州です

○參州の何といふ所

△十五に十三

○弟は

△内に居る七ツになる

○お前は東京へどうして来た

△まゝお父さんと私は一昨年東京に來た

○何をして

△土方をして居た

○どこで土方をして居た

△牛込ステーションのそばで去年まで

○お父さんはどうした

△お父さんは逃げてしまつた

○それからお前はどうした

△私は乞食して居た

○いつまで

△昨日まで

○どここのへんで

△新橋のへんで

○夜はどうした

△新橋の馬車小屋で寝ていた

○ナゼ此處へ來た

△つれの一人が人の下駄を盗んで三人で歩行て居たら探偵に捕まつて二人は逃げたの私は何もしな

○それから

△京橋警察署へつれて行かれた

○知らない

△お父さんは幼なき時死にました

○お母さんは

△お母さんは參州にいます

○お父さんの名は

△お父さんの名は萬五郎

○お母さんは

△おしん

○うちは何をして居る

△うちは農夫でした

○今はお父さんはいないか

△私の七ツの時あとのお父さんが内にきた

○名は

△兼といつた

○兄弟は

△兄弟三人ある私どもに四人

○姉さんか兄さんか弟か

△姉が二人で弟が一人

○姉さんは内に居るか

△姉は二人とも郡内に奉公にいつています

○何しに

△蠶の糸を取りに

○年は

○うれから

△區役所へ行て區役所から茲に來た

○此所はよいか

△こゝに居るのはいやだ、逃げて乞食をしたい、もらつてゐるいていた方が、いゝから

以上は教員の取調べたる者以下は幹事の聞き取りたる者

○お前はナゼ乞食に成たの

△ダツテお父さんが逃てしまつて親方の方に置いて呉れないから

○どここの親方の内に居たの

△牛込の土方の親方の内にお父さんと居たの

○何と云ふ内

△知らない

○いつから乞食をして居たの

△モ一年から

○仲間があつたか

△どつさりあるよ

○お前の知つて居るのを皆云ふてごらん

△知て居るナア百人もあらアホントウの己の仲間は六人ほぞ外ない

○其名は

△皆紳號だよ

○其名と年を聞かしておくれお菓子遣るから

(爰に於て菓子數個を遣す)

△大きなのがチャキと云ふ廿位其次が常公で十三か十四十歳が十三土橋が十二デコチビが十一おけやが九ツそれだけ

○うれで親方はないの
△わたいたちはないの外は者の皆ナ親方がある萬年町に婆アヤと云ふ親方がある東京で一番の乞食の親方

○婆アヤとは女か
△女だよ

○親方があるぞとらする
△親方へ毎日二錢宛出す
○夫れは親方の内に宿つたり食べたりするからだらう
△そーじやないの泊らないでもだす

○どうして出す
△歩を取る者が廻て来るからそれへやる
○皆ナ乞食ばかりするか
△大きな者が泥坊ばかりするけどもわたいらア乞食をする

○何といふのが泥坊をする
△澤山アラア一番上手なのがズンドとネー書生といふの

○其ズンドと書生はいくつ位
△ズンドが甘書生もはたち位新喜といふのは懲役にいつてセイチビも懲役に行た

○新喜とセイチビはいくつ
△新喜は二十三セイチビは十五六黒チビは死た

○黒チビも泥坊か

△ア、皆泥坊夫から赤島だのチビだのといふのは淺草公園に居らア六ツ七ツ位
○夫は泥坊ジャアあるまい
△そんならいいいのはおもらいばかりマダ大きなのはネー鯉口といふ着物をばア屋方から着せて呉れて籠を貸して呉るをして歩くとお巡さんがつかまへぬそれで泥坊するんだよ

○なにをどる
△何でも取るけどもマア下駄だの雪駄だの靴だの盗で歩くと、おしめでもなんでも取らア

○お前も少しは泥坊したか
△わたいたちはマダおさないから取らない
○學校へ上た事はなにか
△上らない

是所謂カツバライニ化せんとする所の窮兒なり彼の語る所に依りて彼等が社會の少年が如何に悪化しつゝあるかを知るに足る以下數人に付て問答あれども之を畧す

會 報

北海道

◎小樽佛教會 北海道は新開の地なれども、我佛教は頗る繁盛の地なり、殊に後志國小樽區は頗る佛教盛なる土地にして

◎近角氏の消息

同氏より此頃清澤、月見、眞岡、本多、百目木、桑門、常盤の七氏に宛聯合的端書にて左の消息を報せられぬ、左に之を掲ぐ

去月米國を發し卅一日英國「リパプール」に着致し直ちに吉田靜致兄（吉田氏は近角氏の學友にして昨年四月文部省より留學せられし人）と同宿致候米國在留二十日恰も飛脚の如し、然れども随分敏活に觀察を遂げたる考へに御座候、今夜執筆通信致候考なれども萬一を慮り、茲に聯合的端書を差出し候、御巡讀御配分被下度候、米國社會事業の發達可驚ものに御座候、宗教は果して四分五裂に御座候、社會事業にて宗教を維持する有様に御座候、活氣は盛に御座候、青年會は「カナダ」合衆國にて「八百」有之候是非其是は早く着手願はしく存候、「シカゴ」及び紐育青年會報告書類呈送致候間是非御覽の上一日も早く御着手願はしく存候、併し米國青年會は下層を目的とする様に被存候間日本の分は少々高尚に致度存候、是は第一の急務に御座候、次に英國に來りて宗教の様子を観るに中々秩序整然として嚴重に御座候「セントポール、ウエスタアペー」杯に參詣候處中々堅固の有様に候、其代りには少く頑固にて世間と後れ候様の傾あるは免れ難き傾向と存候、米國人の「Catholics」も感心英國人の「Osburny」一層面白く相感し申候、米國の進歩可驚ものあるも英國人の守るところ中々感心すべき也、宗教の國家關係の如きは英國の如きは歴史上の國教なる故他の擬すべからざるどころなるも、宗教内の行政に至りては大に法るべきもの有之と存候、米國の宗教法も決して政府の提出の如きものにては無之候、各宗派の性質に隨ひ相異有之候、又各州に隨て之を異にし候故に四分五裂致、併し宗派の自治は決して害することなし、何となれば各其欲する處に隨ひ宗派的「コーポレーション」を許し候、次に當時英は南亞弗利加戰爭に勝ちて狂奔致喜居候、而して今や支那

年來各宗共同の圓融會なるものあり、小樽佛教青年會なるものありしが、同青年會々員中にも、隨分中年老年の人々多きより、名實相應せざる嫌あるを以て、過般一度同會を解散して更に小樽佛教會なるものを興せり、其事業としては、時々名士を請して演說會を開く事、會の機關として「北海佛教」なる雜誌を毎月二回發刊する事、及び毎年釋尊降誕會を修する等なり、猶同會の盛なる事は過般同會々員上京して、大日本佛教青年會の夏期講習會を同地方に開かんことを請求せられしにても略察し得べし、先般本多文學士同地滞在同會の招きに應じて、演說せし際も頗る盛會なりしといふ、猶因に同會の綱領を左に紹介すべし

小樽佛教會要則

第一章 主義
一 佛教に隨ひて、皇道を宣揚す

第二章 綱領
一 佛陀の大悲靈知を信受して各自心行の改進を勉む

一 各自信受したる道心を發展して同情を不遇者に寄す

一 佛教の社會に於ける位置の高上を計る

第三章 會員
一 特別會員 通會會員 隨喜會員の三種とす

第四章 會費
一 特別會員は金拾錢 通會會員は金五錢 隨喜會員は金貳錢を出席の有無にか、はらず毎月出金するものとす

第五章 事業
一 毎月講師を聘して法語演說を開會す

一 毎年四月八日に大會を開く

一 日曜日に少年教會を開く

一 學校に入學し能はざる者を教育す

第六章 役員
一 會長暨名（會務を總理す） 副會長暨名（會長を補佐す） 評議員若干名（會務を評議加議す） 會計員貳名（金錢出納を司る） 幹事二名（庶務を擔任す） 以上投票にて撰定の上囑託す

第七章 心得
一 和合を本とし長上を敬して禮儀を重んずべし

一 會場へ出づるときは珠數を拜參すべし

一 佛祖の禮拜を殷懃にすべし

○印度大饑饉義金募集の概

飢て食なく、たゞ死の到るを俟つ、人生の悲惨、斯くの如く甚しきものあらんや、骨肉路に斃れて相救ふを得ず、怨恩枕を並べて彼の蒼を仰ぐ、人生の悲惨、斯くの如く甚しきものあらんや、我が佛教の祖國印度の地、年凶にして五穀實らず、妻は子を抱えて飢に泣き、夫は妻を顧るに遠なくして歎歎暗涙に咽ぶ、老ひたるは若きを呼び、若きは老ひたるを呼び、子は親を助けんとして力盡き、親は子を助けんとして力盡く、飢葦累々、途に普く、野に徧く、兒女童幼の食を求めんと欲して呼ぶ聲、叫ぶ聲も今は力少からず、空く怨みを呑んで既に他界の鬼と化し去りしもの其數幾千なるを知らず、萬死に一生を得んが爲に、天に哭し地に哭する生靈約五百萬、彼等の運命は風前の燈よりも危し、嗚呼悲惨

哭すれども答へなき天地、英國は見るに忍びずと爲して既に救助義金二十萬ポンドを彼の地に送り、獨逸も亦五十萬マルクを彼の地に送り、暹羅、亦五千萬ルービーを醸出して彼れに送り、米國も亦慈善家の大集會を開きて義金募集に着手せりと傳ふ、夫れ、人道の通義、佛教の要旨は、自他等く救ひ、怨恩並に赦るに在り、恩を禽獸に及ぼし、情を無縁の衆生に致す、これ佛陀の吾人に訓誨し給ふ所にあらずや、佛陀の訓誨に依り、人道の通義に依り、生を此土に托して國威を列強に輝かさんとする吾人、其佛教の祖國、印度の慘狀を聞いて誰れか同情一掬の涙を濺かざらん

爲聞く、印度の地は物價低廉、一人一日の救助費は僅に金四錢を以て足ると、一日壹錢を蓄へば四日にして一人を死地より救ふを得、仰き冀くは大方の志士よ義人よ、其佛教を信ずると信ぜざるとに論なく、其一日一人を救ふに足ると十人百人を救ふに足るとに論なく、應分の資を投して以て彼の憐むべき無告の窮民を賑へ

- 一 義金は多少を論ぜずと雖も成る可く四錢以上たるべし
- 一 義金の送付は來る八月三十一日を限りとす
- 一 義金送付者の芳名は本誌に廣告して領收證に代ふ
- 一 義金は本會宛にて送らるべし(爲替は森川局振込の事)
- 一 義金は佛敎主義雜誌社聯合會の手を経て印度に送付すべし

本郷區森川町一番地 大日本佛敎徒同盟會